

Excuse me...をやめる

英語に不安になると日本人はついつい、前置きや説明が多い丁寧な英語を話そうとします。しかしこれは、自信のなさを露呈するだけでなく、聞いてる相手を疲れさせます。特にアメリカ人にとって丁寧な英語は、「よそ行き」の英語であり、話している相手が「ノンネイティブ」であることを強調するものでしかありません。

そこで私は、思い切って丁寧さを捨てることを試みました。正直、長い会議で、丁寧な英語に疲れていたというのがきっかけですが(笑)。普段なら、「Excuse me. Can you explain that again?」と丁寧に聞き返すところ、「I don't get it. Why is that?」と聞き返すと、これまでとまったく違う流れになったのです。相手は自分の説明が足りなかったのかと、解説をしてくれました。私はそれを、ふんふん、とうなずきながら、時折「Is that so? (本当に?)」と一言はさんだりしたのです。するとどうでしょうか。相手も、熱を入れて話し出し、「Excuse me.」と言っていた時にはたどり着けない「対等な関係」を築けたのです。「自分が目指す英語はこれだ!」と、その時私は痛感しました。仕事で「対等」に話せるようになるには、いまの英語力でもやり方によっては十分通用するので、これがヘタウマ英語3か条の3つ目「丁寧すぎる英語は、思い切って捨てる」です。

脳内将棋盤のフル活用

前回、会議や交渉の事前準備として、「脳内将棋盤」を活用するお話をしました。「脳内将棋盤」とは、プロの棋士が文字通り頭の中に将棋盤を思い描き、何手も先まで予想をするというものです。しかし、英語における脳内将棋盤とは、決して相手の一言一言を想定し、それに対する何通りもの英語を準備するものではありません。AIならまだしも、私たち人間にはそんな準備はできるわけもないのです。では、脳内将棋盤を使って、なにをするのでしょうか。

相手を動かす

自分が一生懸命英語を話す前に、まずは相手を動かしましょう。そのための準備は、実際の対話をする前に相手にコンタクトするところから始まります。

私の場合、自分が会議で話す内容の概要を、事前にEメールで相手に送ります。これにより、先方と実際に会うときには、すでに相手はこちらが話す内容を理解している、という何とも好都合な状況になっています。ですから、いきなり「Have you read my email?」と切り出すだけで、たいてい、先方がそれに対する自分の意見を言うてくれます。これでこちらの負担がぐんと軽減されるのです。相手もこちらの英語を長々と聞いているより、疲れなないのです。これはカラオケと一緒にです。一生懸命歌われると、こちらまじめに聞かないといけないと思う。でも、一緒に歌える歌だと楽しいし、関係性も構築できる。英語も同じです。

相手を知る

ヘタウマ英語を体得するには、事前のやり取りの中で相手を知ることが絶対条件です。せっかちで結論を急ぐ人に初めからこちらの主張をぶつけると、「言い合い合戦」になってしまうことが多く、逆にこちらの出方を見ている人に最初から相手の手の内を聞くような質問ばかりしても通用しません。事前準備は、情報の伝達だけではなく、相手を知るための策なのです。

相手を動かし、相手を知るための「脳内将棋盤」の活用は、丁寧すぎる英語を話していたころの私にはできませんでした。それは「英語」に意識がいつてしまうからです。しかし、相手を動かせる対話ができるようになると、今の英語力で、これまでより良好な関係を築けるようになったのです。

次回はいよいよ最終回。ヘタウマ英語のまとめです!

内藤博久 (準会員)

100年の歴史を有する米国の法律事務所Moses & Singer LLPにて労働法、企業法務、知的財産権などを専門に扱うニューヨーク州弁護士(現在、テキサス州の弁護士資格申請中)。幅広いネットワークで米国の大手法律事務所と提携し、日本企業の米国進出を多角的に支援。日本人経営者を対象としたリーガルセンスを磨くセミナーを実施し、YouTubeの配信なども行っている。



- Email: hnaito@mosessinger.com
- [YouTubeチャンネル 久ラジ](#)
- [US LEGAL AID FOR LEADERS](#)
- [個人ブログ](#)

Houston Walker

■開催中 - May 1 **POPnology @ Space Center Houston**

SF映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」や「E.T.」などに代表されるポップカルチャーが科学技術とどのように影響を及ぼしあってきたのかを紹介する展示です。一般入場料で鑑賞可能です。

■Mar. 20 - Jun. 5

Shahzia Sikander: Extraordinary Realities @ Museum of Fine Art, Houston

パキスタンに生まれ、1995年から1997年までヒューストン美術館の美術教育プログラムに参加し、現在は国際的に活動中のアーティストShahzia Sikanderの展覧会が開かれます。パキスタンの伝統的な細密画と現代美術を融合させた作品群をお楽しみください。

■Mar. 27 **94th Academy Awards @ Dolby Theatre**

ヒューストンでもテキサスでもないですが、皆さんご存知、映画の祭典アカデミー賞の授賞式がハリウッドで開かれます。濱口竜介監督の「ドライブ・マイ・カー」も4部門でミネートされており、賞の行方から目が離れません。

■Mar. 23-27 **Houston Fishing Show @ George R Brown Convention Center**

ヒューストンにも釣りが好きな人はたくさんいます。釣り道具やボート、釣りスポットなど様々な情報が得られる年1回のイベントです。

■Apr. 8-10 **Houston Ballet Nutcracker Market Spring @ NRG Center**

ヒューストンバレエ主催のパザーです。入場料と売り上げの一部はバレエ教育や奨学金などの活動に充てられます。

■Apr. 14-17 **Disney on Ice presents Mickey's Search Party @ NRG Stadium**

みんなの大好きなミッキーマウスがヒューストンにやってきます。氷の上で繰り広げられる様々なパフォーマンスをお楽しみください。

■Apr. 22, 24, 30, May 3, 6, 8 **Turandot @ Wortham Theatre Center**

歌曲「誰も寝てはならぬ」と言えば2006年トリノオリンピックの女子フィギュアスケート決勝で荒川静香選手が金メダルをとったときの曲として記憶している方もいるかもしれませんが、もともとはイタリアオペラの巨匠プッチーニの最後のオペラ「トゥランドット」の中の曲です。どんなお話なのか、気になる方は劇場に足を運んでみてはいかがでしょうか。歌詞はイタリア語ですが英訳表示つきです。

内容は記事執筆時点の情報に基づいています。変更になる場合もありますので、お出かけ前に各自で最新の情報を主催者サイト等でご確認ください。

編集後記

春を告げる鳥の声が聞こえ始めました。陽光の降り注ぐ穏やかな季節がまたやってきます。日本における3月は、来る新年度に向けた異動の多い季節でもあります。新学習指導要領に基づく体制づくりとコロナ禍でのオンライン授業導入に3年間尽力された、日本語補習校の井手校長が3月12日を最後に離任されます。私自身も一教員として井手校長より学んだことは計り知れず、大変有意義な教員生活を過ごさせていただきました。日本での更なるご活躍を祈念しております。

私が初めて手にしたGulf Streamは、2016年の3月号でした。右も左も分からない新天地のHoustonで日本語によるコラムを楽しむだけでなく、日本人コミュニティのイベントや災害時のhow-to情報が詰め込まれた本誌に何度助けられたことでしょうか。本誌は紙ベースから電子データによる配信形態に変わり、さらに多くの読者様にお役立ていただいていると思います。当地に新しく来られた方も、また去られる方も、Houstonの「今」をGulf Streamのリンクより折に触れて楽しんでいただければ幸いです。

Gulf Streamと一緒に作業して下さる方を随時募集しています。日本で長年お仕事をされていた方、また当地で新しいことを始めてみたい方。編集委員としてご活躍されてはいかがでしょうか? 私はレイアウト担当として本誌編集に携わりましたが、フリー素材を使って記事の内容に合うイラストを探したり、フレームで彩りを加えて記事を引き立たせたり。デザイン要素満載の作業で楽しく活動させていただきました。文章を書くことが好きな方は記者や校正、配色やデザインが好きな方はレイアウトと担当分けもされています。少しでも興味を持っていただけたら、ぜひ下記メールアドレスまでご連絡ください。

皆さま、今後ともGulf Streamをよろしく願っています。(編集委員: 芦田友紀)

ガルフストリームは毎月15日発行です。

編集委員および投稿募集中!

問い合わせ先: sansuikai@jbahouston.org

ガルフストリームは、ホームページでも閲覧可能です。

<https://www.jbahoustongulfstream.com/>

発行: ヒューストン日本商工会

発行責任者: 川上篤樹

編集委員長: 稲田徳弘

構成・編集: ガルフストリーム編集委員一同